

～総論～

1

惹かれあうコドモたち

～野生ニホンザルのコドモの遊び集団の観察から～



島田 将喜
SHIMADA Masaki

帝京科学大学生命環境学部/アニマルサイエンス学科/講師

子どもは元々同世代の仲間と「惹かれあう」性質を持っている。それは動物としてのヒトにとって、どのような意味があるのだろうか。ヒトと似た社会的特徴を持つニホンザルの観察から見える、子ども同士の遊びが社会性に与える影響とは・・・。

惹かれあう赤ちゃん・子どもの不思議

よく晴れた休日の午後などに、まだ言葉を話さない一歳になる前のわが子を抱っこしたり、ベビーカーに乗せたりして家族で散歩に出かけると、同じように子連れで散歩をしている見知らぬご夫婦とすれ違うことがあります。そうした時、大人である親の方は、知らない人だからと無視するよりは、親は親同士、笑顔で挨拶を交わして道をゆずりあってすれ違うのが普通でしょう。

こうした場合、面白いことに、赤ちゃんは赤ちゃん同士、じっと互いの眼を見つめあっていることがあります。すれ違う瞬間だけそうするというわけではなく、他の子が離れたところにいることに気がつくと、その時まで別なことをしていても、その子の方に興味を移すことでしょう。すれ違った後も、相手が自分の視界外に消えてしまうまで見つめていることもあります。

また公園や家の中など、お母さんがすぐ傍にいてくれる状況なら、わが子は見知らぬ赤ちゃんや子どもを見つめるだけでなく、ヨチヨチと歩いて近づこうとし、近づかれた方もまたその接近を「許容」することでしょう。

どうやらわが子は見知らぬ他の赤ちゃんや子どもと惹かれあい、一方で縁遠い大人とはそのように惹かれあうことは、まれ



写真1 純野生ニホンザルが生息する金華山全景

なようです。言葉を持たない赤ちゃん同士がそうした惹かれあいの中で、いったいどんなことを通じているのか、親の私にも直接には分かりようがありません。でも赤ちゃんや子どもが、お互いを大人とは異なる存在として認識し、大人に対するのとは接し方を変えていることは明らかです。

赤ちゃん和大人の区別を誰に教わったわけではないのに、赤ちゃん同士ならば見知らぬ相手であっても惹かれあうということは程度の差はあれ、どの子どもでもみられる行動のようです。こうした観察を重ねると、どうやら赤ちゃんや子どもは「生まれつき」他の赤ちゃんや子どもと惹かれあうものなのだ、と考えたくなります。そしてこの「惹かれあい」は、子ども期に入っても続くようです。

この赤ちゃんや子ども同士の惹かれあいが、ヒトにとって生まれながらにして持つ能力なのだとすると、それにはいったいどんな意味があり、どのような起源をもっているのかを知りたいくなります。

こうした問いに対して本稿では、私が取り組んでいる、宮城県金華山に暮らす純野生ニホンザル(以



写真2 毛づくろいするニホンザル

下、単にサルと表記)のコドモやアカンボウの「遊び」の研究からどんなことが言えるかを考えてみたいと思います。そのためにまずサルがどのような動物で、どのような社会生活を営んでいるかを簡単に紹介することから始めましょう。

サルの社会と順位関係

サルは、私たちヒトと同じく霊長類というグループに分類され、動物の中でもヒトに近縁な動物の一種です。近縁な動物同士は進化史上、近い過去に共通の祖先から分かれた関係にあるので、サルはヒトにとっていわば進化の「隣人」だと言えます。また日本人とサルは長い間生活空間を共有しながら、同じ日本列島で文字通り隣人として暮らしてきました。

ヒトとサルに共通する大きな社会的特徴は、どちらも群れ生活者だということです。野生のサルは、複数のオトナオスと複数のオトナメス、そしてそのメスの子たちを含む、十数頭から数十頭の非常にまとまりのよい群れを形成して、食べ物を探し移動しながら生活しています。私たちと同じように、サルも生きている間のほとんどの時間、群れを構成するメンバーと日々付き合っていて暮らしていかなくてはなりません。

サルの群れ内のすべての個体間には直線的な順位関係があります。たとえば群れのメンバーの多く



写真3 アカンボウと母親

が一本のブナの大木でその実を食べている時には、測ったように数メートル間隔で離れて食べる様子が観察されます。これは順位の低い方が高い方に遠慮し、近づき過ぎないようにする結果です。順位の低い方がブナの実を食べるのに夢中で、高い方に近づき過ぎてしまうこともあります。そうした時には順位の高い方が、一瞬睨みつけるなどの威嚇をし、低い方が距離を取ることで秩序が回復します。このようにして群れのメンバーはトラブルを避けることができ、トラブルが起こったとしても実際に喧嘩をして傷つけあうのを避けることができます。順位関係は、長期間にわたって付き合っていくことになる群れのメンバーの間に、決定的な敵対関係が生じるのを防ぐための社会的装置と考えることもできます。

ヒトの場合もそうですが、個体間に順位関係があるからといって、順位の高い方がいつも威張り、低い方がいつも卑屈で、互いが近づくこともできないというわけではありません。むしろ逆です。ブナの実の例のような個体間に何らかの利害がからむ時以外のほとんどの時間には、順位関係があらわになることはあまりありません。たとえばサルたちは日常的に互いを毛づくろいしあって、他個体に自分の体についたシラミなどの寄生虫を取り除いてもらわなくてはなりません。順位の高い方も低い方も互いに毛づくろいを交換しあって清潔を保っているのです。また冬の寒い夜など、サルたちは密集して眠ることがあります。これは「サル団子」と呼ばれ、そうすることで保温効果を高め、寒い夜を越すのです。これらの場合に順位関係を表面化させても得なことはありません。

つまり、サルが社会生活を営む上で必要な認知的能力とは、互いの順位関係を認識する能力だけでなく、その順位関係を状況に応じて正しく利用できる能力ということになります。



写真4 サル団子

サルのアカンボウ・コドモの遊び

これまでの話は、オトナのサルで一般的な社会関係についての話でした。ではサルのアカンボウ(生後6カ月齢ころまで)やコドモ(生後4~5歳まで)はどのような生活を送るのでしょうか。

ヒトでもそうですが、この時期のサルは基本的に生存にかかわるさまざまなことを母親に依存しながら生活します。サルはその集まりのよさから、母親たちが休んだり毛づくろいしたりする時には、大きな集団を作ることが普通です。普段母親の近くにいるアカンボウやコドモたちも、親の近くで出会う機会が多くなります。このように母親たちが近くにいる状況の下で、ヒトの赤ちゃんや子どもがそうであるように、サルのアカンボウもコドモも、互いに「惹かれあい」ます。

アカンボウは、運動能力が未熟ですが、同じ年に生まれたアカンボウが近くにいれば、ぎこちない動作ではありますが、互いに集まってもつれるようにして遊びます。そしてコドモ期になると惹かれあい集まったサルたちは、観察者の肉眼では何が生じているのか追いつけないほど、スピーディで複雑な遊びを長時間続けることも多くなります。

季節によって遊びの頻度や量には違いがあります。たとえば2004年の夏など、金華山の森で食べ物を得るのが厳しい季節には、遊びに費やしたのは日中の活動時間全体の1%ほどに過ぎませんでした。ところが2007年の秋など、森の食べ物が豊富な季節には、活動時間のうちの8%ほど、つまり一時間程度を、遊びに費やしていることがわかりました。観察者の目には、隙を見つけたらすぐに遊んでいるように感じられます。野生に生きるサルの生活は厳しく、生きていくのに不可欠な行動に大半の時間を費やし、遊ぶ暇などないとイメージされがちですが、「ゆとり」がある季節にはサルのコドモもよく遊ぶということがわかってきています。

彼らをもっとも生き生きして見えるのは、このように同じくらいの年齢のアカンボウ・コドモたちと集まって遊ぶ「社会的遊び」に熱中している時だと私は思います。ヒトの子どもや赤ちゃんは一人遊びをよくしますが、サルはあまりしません。2007年秋の調査では、観察されたコドモの遊びの時間全体の98%が社会的遊びでした。サルの遊びはそのほとんどが社会的遊び、つまり遊ぶ相手がいて初めて成立する遊びだということです。

この社会的遊びの具体的な遊び方のレパートリーは、とても多様であることが確かめられています。



写真5 水場で泳ぐサル

追いかっこや取っ組み合いといった遊び方はどこの群れのコドモにも共通して見出されます。一方、ある群れでは見られるのに、その他の群れでは見られないといった、いわばその群れのコドモに固有の遊び方があることもわかってきました。

サルのアカンボウやコドモの遊ぶ場所はとても多様です。先ほど例にあげた追いかっこや取っ組み合いは、樹上、地上を問わず、ほとんどあらゆる環境で生じうる遊び方です。金華山のコドモは、夏の暑い日には、沢に溜まった水場に集まって、水に飛び込み泳いだり、ゆっくりと浸ったりして遊びます。

このようにサルにとって社会的遊びとは、アカンボウ・コドモ期を彩る活動であり、彼ら同士の「惹かれあい」は、そうした社会的遊びを促しているといえるでしょう。

遊びに必要な認知的能力

アカンボウ・コドモ期が生涯のうちの長い時間を占めているというのは、サルやヒトを含め霊長類の発達上の大きな特徴です。このことはサルの社会の形成にも大きな影響を与えます。というのも、多い年には群れの半数程度がアカンボウかコドモで占められることになるからです。そして彼らは遊ぶことで彼ら独自の社会を形成しているということが出来ます。

ここで注意しなくてはならないのは、先に述べた「順位関係の認識」は、コドモはすでにできるようになっている、ということです。アカンボウも生まれて数カ月後には順位関係を学習するようになると考えられています。彼らが取っ組み合ったり追いかっこをしたりして遊ぶことができるということは、自分たちの順位差はそこには存在しないかのようにふるまうことができる、ということにほかなりません。

また社会的遊びにおいては順位の差ばかりでなく、年齢の差や力の差をあらわにすることも抑制されます。力の強い者は、取っ組み合いの際、のしかかられる役割を自らとり、逆に力の弱い者は、そうした相手の行動を見た場合には、相手の方が強い



写真6 樹上での取っ組み合い

らと自分の行動を抑制するのではなく、逆に相手にのしかかることで遊びを持続させてゆきます。

しかしたとえ取っ組み合いの際、一方が他方を強く噛みすぎて、相手が泣いてしまうということが起こります。するとそれまで一緒に遊んでいたコドモたちは、自らの順位関係や力の差をあらわにして相手を攻撃したり、逃げだしたりすることになります。一度こうした関係があらわになってしまうと、彼らは時間をかけて「仲直り」しないと再び遊ぶことができません。このように抑制された順位関係や力の差は、簡単にあらわになりうるものであり、それを互いに抑制することで、遊びを持続させているのです。

またたとえば遊びに誘いかけようとした相手が、自分より順位の高いコドモで、その子が食べ物を食べているような状況では、むやみに接近すべきではないでしょう。接近された方のコドモは、きっと相手の接近を遊びの誘いかけとはみなさず、自分の順位が相手より高いことを利用し、食べ物を守ろうとして攻撃してくるかもしれません。

「惹かれあい」は社会的遊びを促しますが、うまく遊びが開始され、遊びが持続するためには、刻々と変化する状況に応じて相手の行動を適切に読み取り、対処する認知的能力が求められるのです。

サルの社会的成長と惹かれあい

サルのオトナが状況に応じて順位関係を利用して群れの秩序を保っているのと同様に、アカンボウやコドモの集団においてもやはり、順位関係や力の差をあらわにする状況を使い分け、社会的遊びの場面ではこれを抑制することによって、交渉を円滑に持続させています。いうまでもなく、こうした能力を身につけるには経験の積み重ねが必要です。コドモはコドモ同士で遊ぶことの中で徐々にできるようになってゆくに違いありません。

サルのアカンボウやコドモの立場からは、彼らが



写真7 地上でも取っ組み合い

そうした能力を身につける理由はおそらく、単にそれができないと仲間と遊ぶことができないから、という単純なものなのではないかと私は考えています。しかし長いアカンボウ・コドモ期を通じて続く社会的遊びのなかで身についたそうした能力は、彼らが成長しオトナになってからも、「状況に応じた順位関係の利用」といった社会の秩序形成の上で役立つに違いありません。

サルのアカンボウは生まれてくると同時に、生きてゆくためには自分の母親を含むオトナとの付き合いを円滑にする必要が生じます。そして同年代のアカンボウやコドモとの付き合いにもうまく対処してゆかなくてはなりません。サルのコドモが別のアカンボウやコドモと互いに惹かれあうのには、いちはやく無駄なく社会的遊びの時間を確保し、他個体との付き合い方を学習する機会を増やす、という効果があると考えることができます。

わが子が見知らぬ赤ちゃんや惹かれあう、生まれながらに備わった能力は、サルのアカンボウが他のアカンボウやコドモと惹かれあうという能力と起源は同じものなのではないでしょうか。それは長いアカンボウ・コドモ期をもち、群れをつくって他個体と関わりながら生きてゆくということを基本としている霊長類に古くから備わっている能力ではないだろうか、わが子を眺めながら私は考えています。



写真8 追いかっこ